

「主体的・対話的で深い学びの推進」

ー 生徒の自己肯定感を育む授業づくりを目指して ー

主幹・指導主事 相川 恵子
主幹・指導主事 小俣 義一
主幹・指導主事 橋田 浩

キーワード 主体的・対話的な授業づくり 自己肯定感

I 主題設定の理由

1 新学習指導要領の視点から

今年度の「やまなしスタンダード」授業づくりの7つの視点では、生徒の活動「②話し合い、討論、発表などの言語活動を効果的に取り入れている。」「③児童生徒は、他の人の話や発表に耳を傾けている。」に焦点化し、生徒の考えを深化させるとともに、教員は確かな学力の育成を図ることを目標としている。

2022年度から実施される学習指導要領の方向性では「主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）の視点」がますます重視され、学習過程の改善が求められている。具体的には、授業の方法や技術の改善のみを意図するものではなく、生徒に目指す資質・能力を育むために「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の視点で、授業改善を進めるものであることが示されている。

研究協力校においては、これまでも生徒が主体的に取り組む授業づくりに取り組んできた。昨年度は「主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニングの視点）の推進ー授業との有機的な関連を図った家庭学習の推進ー」を研究主題として、生徒の家庭学習や学習習慣について実態調査し、家庭学習である課題を含めた授業づくりの研究に取り組んできた。国語科では、アクティブラーニングの視点を活かして、OPPAシート・ホワイトボードを活用した授業実践、数学科では主体的・対話的な学びの構築を目標に、プリントを活用した学び合いを行ってきた。

2 自己肯定感について

国立青少年教育振興機構によると、自己肯定感とは「自分のあり方を積極的に評価できる感情、自らの価値や存在意義を肯定できる感情」と明記さ

れている。内閣府の「『我が国と諸外国の若者の意識に関する調査』における国際比較調査」では、「自分は役に立たないと強く感じる」子供たちの割合は日本は諸外国と比べて、必ずしも低い状況ではないが、日本の子供たちの自分自身への満足感は諸外国に比べて低いと報告されている。具体的には、平成28年教育再生実行会議で出された「高校生の生活と意識に関する調査」国際比較で、「私は、自分自身に満足している」が45.8%と半数以下、「自分はダメな人間だと思うことがある」と思っている高校生が72.5%で、諸外国に比べてかなり自己肯定感が低い状況が示されている。

研究協力校における聞き取り調査でも、「自信をもって答えられない」という点を課題として挙げており、「もっと対話的に取り組ませたい」と考えていても、人間関係の難しさや学び合うまでなかなか到達できない学力不足の問題など根本的な課題を抱えていた。ベテラン教員の中には、ホワイトボードなどを利用した言語活動を取り入れている教員もいるが、研究協力校での経験の浅い教員は、自分が培ってきた手法が通用しない、追いつかないと悩んでいる様子が見られた。

II 研究の目的・方法

1 目指す生徒像

本研究では、「主体的・対話的で深い学び」を推進させることにより、「自己肯定感」が高められるのではないかと考えた。生徒はそのような授業を受けることにより、教員や仲間から認められ、それが成功体験につながり、自己肯定感が醸成される。その過程において、教員が「主体的・対話的で深い学び」の視点を取り入れた授業を展開できるように改善を行い、センター主事は支援を行う。

2 研究の方法

(1) 研究協力校の実態把握

研究担当者から生徒の様子を聞き取り、授業づくりや実態調査の基礎資料とする。

(2) アンケートによる生徒の実態調査

学習や学校生活で取り組みたいこと、生徒自身のことに関する調査を行い、生徒の実態や意識を把握する。

(3) 国語科・数学科における主体的・対話的な授業実践

2学期に実施する単元・領域に対する授業支援や授業実施後の生徒の変容を調査、分析する。

(4) やまなしスタンダードの視点に沿った学びのあり方の協働研究

実践報告・共有による他教科・学年への支援の拡大を図り、新学習指導要領を見据えた「単元等のまとまりを見通した深い学び」の実現のための支援を行う。

Ⅲ 具体的な取組

1 研究・教科担当への聞き取り（6月）

研究協力校の生徒の様子として、①中学校では集団のフォロワーだった生徒も多い。②高校進学後、リーダーになる場面があり戸惑う生徒もいる。③中学校まで発表する場面がなく、解答が合っているのに、戸惑ったり、自信をもって答えられなかったり、しかし発表の機会を与えられると、嬉しくなったりと反応も様々である。④周りに関心や興味がない、互いにコミュニケーションが取れない生徒もいる。

聞き取り時に参観した1年生の数学の授業では、教員が時間をかけて丁寧に教える過程の中で、「学び合う」姿勢が自然と生まれている生徒も見受けられた。

2 アンケートによる生徒の実態調査

1年生 148名（男子 85名，女子 63名）
7月LHRにて実施
5項目 全 32問（補助資料1）

(1) 授業・家庭学習に関して

家庭学習を行うときは80.0%以上が、「宿題があるとき」「定期試験・試験期間中」としている。

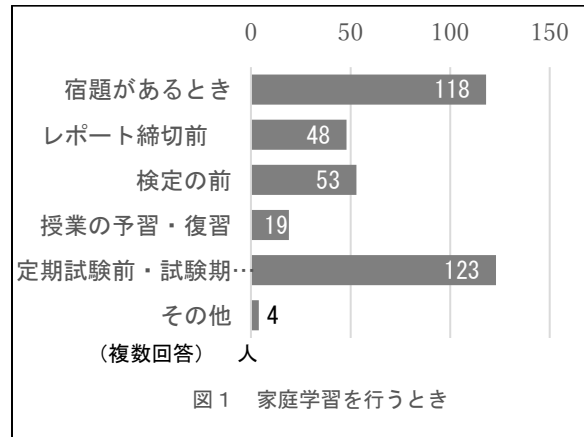


図1 家庭学習を行うとき

試験期間を除く1日平均の学習時間は、平日20.5分、休日26.9分である。

「勉強に対する気持ち」（図2）では、「やる気に満ちている」「今の成績を伸ばしたい」という積極的な生徒が50.0%を超えている。「必要だから勉強している」「勉強する意味がわからない」「勉強する気持ちにならない」と消極的な生徒は30.0%以下で、その内、勉強に意義を見出せないと9人が回答している。

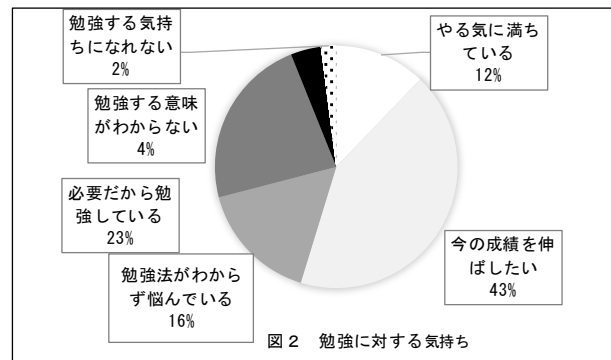


図2 勉強に対する気持ち

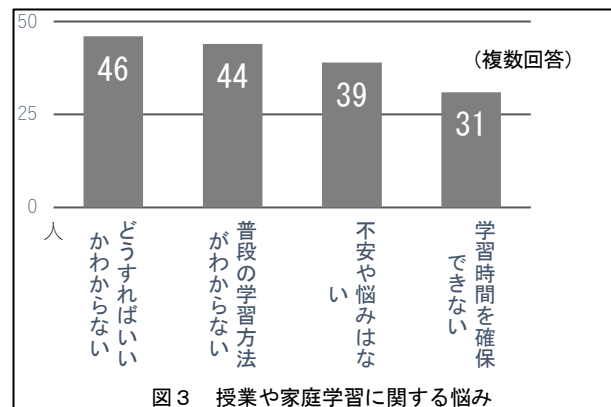
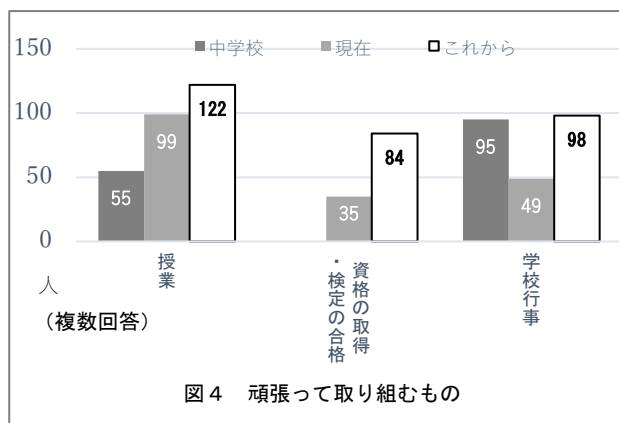


図3 授業や家庭学習に関する悩み

授業や家庭学習の悩み（図3）で、学習時間に関係なく、不安や悩みはないとする生徒

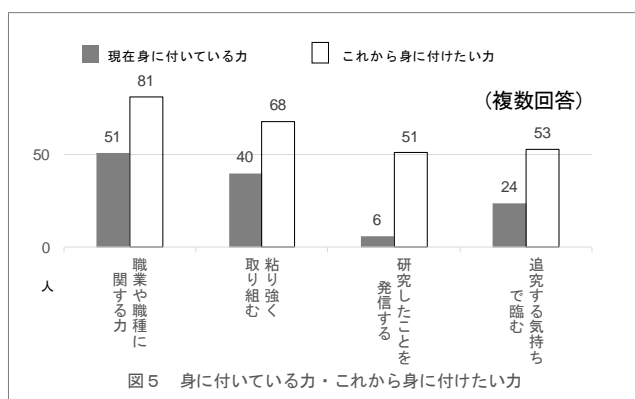
が25%以上の39人となっている。「どうすればいいかわからない」「学習方法がわからない」等、複数回答する生徒も多く、ジレンマになっている生徒が多いようである。「授業がつまらない」「集中できない」という生徒は比較的少なかった。

(2) 学校生活で取り組みたいこと



中学時代からこれからについて取り組みたいことを比較してみると(図4)、「授業」は「これから」が中学校時に比較して2倍以上となっている。生徒たちは高校生活にも慣れ、生活習慣や課外活動は現状通り、これから授業や資格取得・検定合格に積極的に取り組むという高い意識をもっているため、この意識の高さが、授業改善に取り組むきっかけになるのではないかと考えた。

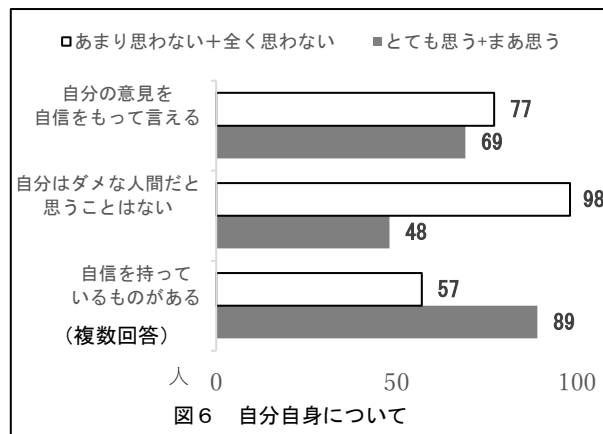
(3) 身に付いている力・身に付けたい力



「身に付いている力」と「身に付けたい力」を比較すると(図5)、研究協力校は専門学科高校であるので、将来を見据えて「職業や職種に関する力」、「粘り強く取り組む力」を身に付けたいとしている数は増えてはいる

が、「研究したことを発信する」、「追究する気持ちで臨む」という「探究心」に関する力もかなりの数の増加がみられる。大学入試制度が変わるこの学年の生徒達には、基礎学力に加えて探究的な力も必要となる。

(4) 自分自身について



特徴的な回答項目(図6)で「とても自信になった出来事を経験したことがある」「自分の能力の中で自信をもっているものがある」では、過去の体験の中で自信を付けてきたようだが、まだ過小評価していたり、自分の意見については自信がなかったりする傾向が見られる。

アンケート結果による研究協力校の生徒像を以下のようにまとめた。

- ア 学習に意欲的な生徒も多いが、学習方法が分からず悩んでいる。
- イ これから授業や資格取得・検定合格に頑張りたい。
- ウ 将来のために身に付けたい力もあるが探究的な力も身に付けたい。
- エ これまで自信につながる体験もしてきたが、まだ確たる自信がもてていない。

3 校内研修

8月末に「授業改善」をテーマとして、研究協力校での校内研修会にて、以下のような内容で研修を行った。①授業改善に関するグループワーク、②生徒アンケートの報告、③次期学習指導要領のポイント(6月本センターにおける特別研修会Ⅰの報告)の説明、④授業づくりの提案を行った。

研修会後のアンケート(40名中39名回答)では、「生徒が自信をもてるよう授業を改善していきたい」「授業改善をしたいが忙しくてできない」「勉強を楽しくするのも教員の力だと感じた」「基礎学力について、教科に関係なく徹底的に考え工夫しなければならない」「他教科の取組を知ることができ、とても参考になった」「生徒が考える授業を増やしたい」等が自由記述で挙げられた。このことから教員も生徒たちをどのように指導していか模索している様子が伺える。上位層の生徒に対しては、研究協力校が希望者を対象に放課後に行っている「レベルアップタイム」を生かした探究的な学習、下位層には反復学習もしくは個別支援等が考えられる。

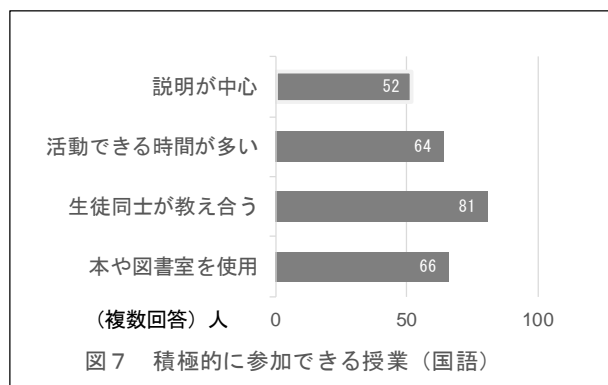
また授業改善や評価で実践を重ねている教員もいるので、校内研修や教科会議などを通じて授業づくりや学習支援の方法を共有する機会を設ける必要がある。定期的な教科会議・相互参観授業等を充実させながら、新学習指導要領を踏まえて、センターからは情報提供、授業づくり・学校づくりへの支援を行う。

IV 実践研究

1 国語科

(1) 教科に関する生徒の意識

先のアンケートにおける、国語の授業に対する意識に関する質問では、「積極的に参加できる授業」(図7)として、「生徒同士で互いに教え合うことができる授業」をあげている生徒が多い。



(2) 国語科での取組

高等学校の古典の授業においては、作品の読解に終始し、単元の最後にその作品につい

て感想を書いたり、話し合ったりすることが「言語活動の充実」であるとするような理解がいまだに根強い。主体的に学び、思考力・判断力・表現力等を高めるためには、古典の授業においても、その教材にふさわしい言語活動を、単元を通して設定することが必要である。また、単元などの時間のまとまりを見通して授業を計画する「単元観に基づく学習指導案」を作成することで、その単元で生徒に身に付けさせたい資質・能力を明確化することにもつながると考えられる。

(3) 検証授業

「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業改善を目指し、国語総合の古典分野での授業について検証することとする(図8)。

- ア 対象 2年
- イ 単元名 ①随筆 ②物語
- ウ 教材名 ①徒然草 ②伊勢物語
- エ 期間 ①10月 ②1月
- オ 中心となる言語活動

①「友とするに悪き者」を読み、友達にしたくない人物像について、班で話し合い、発表する。

[補助資料2 授業プリント]

②「筒井筒」を読み、女の親はなぜ他の男を紹介しようとしたのか、班で話し合い、発表する。

[補助資料3 授業プリント]



図8 検証授業の様子

(4) 成果と課題

今回の授業では、「読むこと」領域の指導に、話し合い・発表などの言語活動が単元を通して位置付けられていた。「話すこと・聞くこと」「読むこと」「書くこと」の指導領

域と言語活動との関係の正しい理解に立ち、生徒の「読み」を深めるための手段として、言語活動が効果的に取り入れられていたことが大きな成果である。

また、班の話し合いや発表にはホワイトボードが有効利用されていた(図9)。言語活動の充実のためには、その要となる国語の授業において、言語活動の手段・手法を正しく教え、それを学校全体で共有することで、学習の効果は倍増すると考えられる。



図9 ホワイトボードを利用した授業

一方、これらの言語活動をどのように評価するかが今後の課題となる。話し合いや発表などの外化された言語活動を通じて、生徒の内面における「読むこと」の深まりは見取ることができるものである。生徒の自己評価や生徒同士の相互評価、また観点別学習状況の評価において、生徒の「読むこと」の変容をどう評価に反映していくのか、今後も検証の積み重ねが必要となろう。

さらに、「自己肯定感」を高めることとの関連において、話し合いや発表などの言語活動で「学び合う場」を実現することの意義は大きい。生徒への事後アンケートにも、「みんなのいろいろな意見が聞けたので楽しかった」「一人で考えるよりも班で話し合うことで、話の内容がわかりやすかった」といった感想が、多く寄せられた。自分の考えが授業の展開に取り入れられた経験や、自分の思いがクラスの仲間を受け入れられた体験を通じて、学びに向かう力はいっそう養われるものであろう。生徒が自らの学びを振り返って、次の学びに向かうことができるような学習・指導方法の改善を目指していきたい。

2 数学科

(1) 教科に関する生徒の意識

数学を学ぶことに対する生徒の考え方は、

① 図9について

「普段の生活にも役立つ」と考えている生徒が66%に上った。

② 図10について

積極的に参加できる授業形態は、「生徒同士が教え合う授業」を148人中95人(64%)の生徒が望んでいる。

さらに、「問題演習」を通して主体的に取り組みたいと47人(32%)が望んでいる。

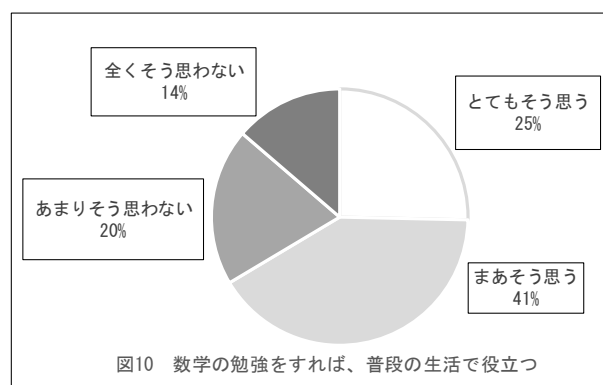


図10 数学の勉強をすれば、普段の生活で役立つ

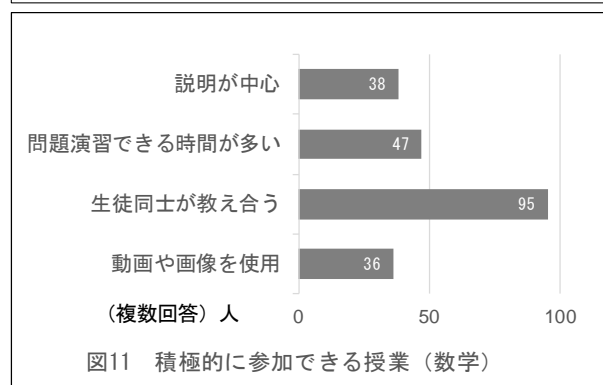


図11 積極的に参加できる授業(数学)

(2) 数学科での取組

今年度の研究主題「主体的・対話的で深い学びの推進」を通して「自己肯定感」を育む授業づくりを目指した授業改善の支援を行った。

特に、

- ① 生徒が数学的な事象に対して興味関心をもって、自ら進んで学習に臨むことができる授業づくり
- ② 生徒の学習の課題を踏まえて、生徒個々の状況に応じて学びを引き出し、一人一人の資質・能力を高める授業づくり
- ③ 生徒が主体的に学習を見直し振り返る場面や、

考えを深める場面が設定された授業づくり

④数学の授業を通して「自己肯定感」を高められる授業づくり

に重点を置き、同校担当者や教科会議等で検討を重ねた。

具体的には年度当初より活用している自作プリント（生徒の達成感を引き出すために、基礎基本をベースに要点を簡潔にまとめたプリント 補助資料4）による授業をベースに、

①「ペア学習」により、互いに学び合うことができる学習環境づくり

②数学の授業を通して「自己肯定感」の向上を目指した「自己評価・目標シート」（図12 補助資料5）の活用

について取り組むことになった。

「ペア学習」については、教員が主導してペアやグループを作るのではなく、生徒同士が自発的にペアやグループを作ることとし、生徒の主体性を尊重した(図11)。

中には、ペアにならずに1人で授業に臨む生徒もいたが、生徒自身が教科書やプリントを手がかりに考えることを通して自己の考えを広げ深めることができるものとして、強制的にペアを作ることとは避けた。



図11 「ペア学習」の様子

「自己評価・目標シート」については、

- ①「身に付けたい力」の設定（教員が生徒に身につけて欲しい21コのみ）
- ②生徒自身が数学の授業を通して身に付けたい6つの力を個々に考え、単元の初めに設定
- ③単元の終了後に自己評価を実施し、成果や反省点・課題を生徒自身が把握
- ④自己の反省点・課題をどのように克服し、今後、どのように取り組むか検討

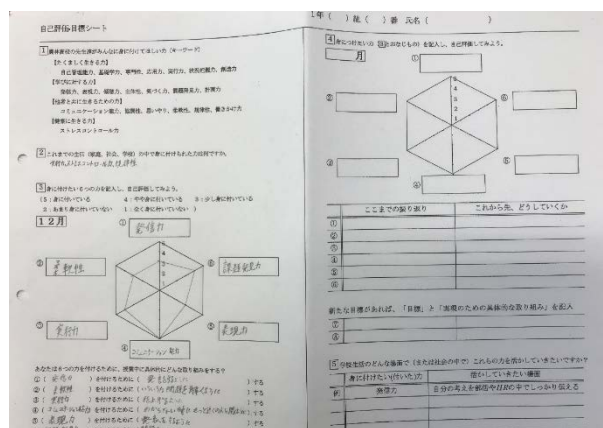


図12 「自己評価・目標シート」

(3) 成果と課題

2年間の継続研究のため、事後アンケート等は今後、年度末に実施する予定である。現在は、データとしての実践の成果は検証することはできないが、次のような成果と課題が挙げられると考える。

- ①生徒のアンケートを通して、生徒の実態や考え方を把握することができたことは、教員側が固定的にイメージしている生徒像を覆すことができた。「生徒の授業に対する意欲を引き出す」ための授業改善はどうあるべきかを考えるよいきっかけとなり、大きな成果が得られた。
- ②今年度は「自作プリント」の活用、「ペア学習」の実施、「自己評価・目標シート」の活用に重点をおいた実践を行ってきたが、特に、授業者が単元設計を行い授業の目標等を明確にするとともに、学習者自身が身に付けたい力を明確にすることが、主体的・対話的で深い学びに効果的であるかどうかを検証する必要がある。
- ③授業者の評価と学習者自身の自己評価をどのように有機的に結びつけるか、また生徒同士の相互評価をどのような場面で活用するか課題である。

今年度1年間を通して、学校現場においては、生徒の実態を常に把握・理解し、教員相互が協同して生徒の実態に合わせて、どのような指導方法・支援方法が効果的であるかを研究することが大切であると改めて実感した。また、学校現場の研究体制をサポートできる、教育センターの効果的か

つ効率的な支援体制について、今後も研究を深めていく必要がある。将来的には数学の授業で活用した「自己評価・目標シート」を、生徒の学校生活における自己成長のPDCAサイクルに活用できるモデルを作成し、生徒の自己肯定感の向上に役立てることを目標に、今後も同校の先生方・生徒の皆さんと協力しながら研究を継続し、より有効的な方法を探っていきたい。

V 研究のまとめと今後の課題

今年度は研究初年度ということもあり、研究協力校との連携を図るのに時間を要した。しかし生徒のアンケート調査を行い、生徒の学習に対する意識、特に「今後の学校生活では、授業に頑張って取り組みたい」という積極的な姿勢をもつ生徒が、過去の取組に比較して2倍以上、55名以上から122名に上ったことから（図4）、この生徒の向上心が教員の授業改善への動機付けになると考え、校内研修でも提案を行った。それまで教員側は生徒の学習意欲をあまり感じられなかったようだが、生徒アンケートや研修会を通して、少しずつ学びの在り方を変えていかなければならないと認識できたことが成果と考えられる。

「自己肯定感」を高める授業づくりの視点については、一教科一単元の授業だけでは、なかなか醸成は難しい。今回、実態調査のみで生徒の事後調査は実施しなかった。それは短期間では「自己肯定感」の向上には、至らないと考えたからである。生徒は学校の中で、様々な経験を積んでいく。学校行事・部活動でも可能ではあると思うが、学校生活の中心である授業においてこそ、「教育目標」や「育てたい生徒」は実現されなければならない。そのためには、時間はかかるかもしれないが、様々な教科・活動での積み重ねも必要となってくる。教科学習が苦手な生徒でも、HR活動や総合学習での取組により、認められる体験を重ねることが、生徒の自信の構築につながる事が期待できる。教員側の喫緊の課題である授業改善を起点として、クラス・学校づくりに発展し、最終的には生徒自身の成長につながるように支援していく。

「新しい学習指導要領の考え方」によるとアクティブラーニングの視点では、「対話的な学びの実現のためには、子供同士の協、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深めていくこと」を求めている。この「対話的な学び」とは、子供の同士の学び合いだけでなく、子供と教員、さらに授業中のやり取りだけでなく、生徒たちの授業の振り返りに対して、教員から記述を返していくなどすれば、「対話的な学び」につなげられ、生徒が認められたと実感できる場面になると考えられるので、今後、積極的に取り入れていきたい。

来年度は全指導主事に関わるという形で、研究体制を拡充させていき、授業づくり・学校づくりを支援しながら、生徒の変容について見取っていく。

【参考文献・資料】

- ・文部科学省（2017）「新しい学習指導要領の考え方—中央教育審議会における議論から改訂そして実施へ—」
- ・山梨県立農林高等学校（2018）「主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニングの視点）の推進—授業との有機的な関連を図った家庭学習の推進—」
- ・国立青少年教育振興機構
〈<http://www.niye.go.jp/pickup/post1/>〉
- ・文部科学省（2016）『日本の子供たちの自己肯定感が低い現状について』
- ・内閣府（2013）「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」における国際比較
- ・文部科学省（2016）中央教育審議会答申

【研究協力校】

山梨県立農林高等学校 校長 深澤 眞悟

【山梨大学連携教育研究会アドバイザー】

山梨大学 客員教授 小川 巖

【総合教育センター 研究アドバイザー】

研修指導課長 横森 伸司
業務推進主任 池谷 佐知子